

グランド現代百科事典

Grand Gendai

12

コウーコシ

学研

グランド現代百科事典

Grand Gendai

12

コウウーコシ

1983年6月1日 改訂新版第1刷発行

1984年2月1日 改訂新版第2刷発行

全巻セット定価 218,000円

編集・発行人——鈴木泰二

発行所——株式会社**学習研究社**(学研)

東京都大田区上池台4-40-5 〒145

電話 東京(03)720-1111 (大代表)

振替 東京8-142930

印刷——凸版印刷株式会社

表紙クロス——東洋クロス株式会社

ケース見返し用紙——富士共和製紙株式会社

本文用紙——三菱製紙株式会社

箔押——有限会社斎藤商会

製本——凸版製本株式会社

製函——高田紙器工業所

©GAKKEN 1983

*本書内容の無断複写を禁ず

*この本に関するお問合せ、製本上のミスなどが
ございましたら、下記あてにお願いいたします。

文書は 東京都大田区上池台4-40-5 (〒145)

学研・ユーザーサービス部「グランド現代百科」係

電話は 東京 (03) 720-1111 (大代表)

本書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の
1地形図、20万分の1地勢図を使用して調製したものである。

Printed in Japan

161 262

ISBN4-05-150087-x

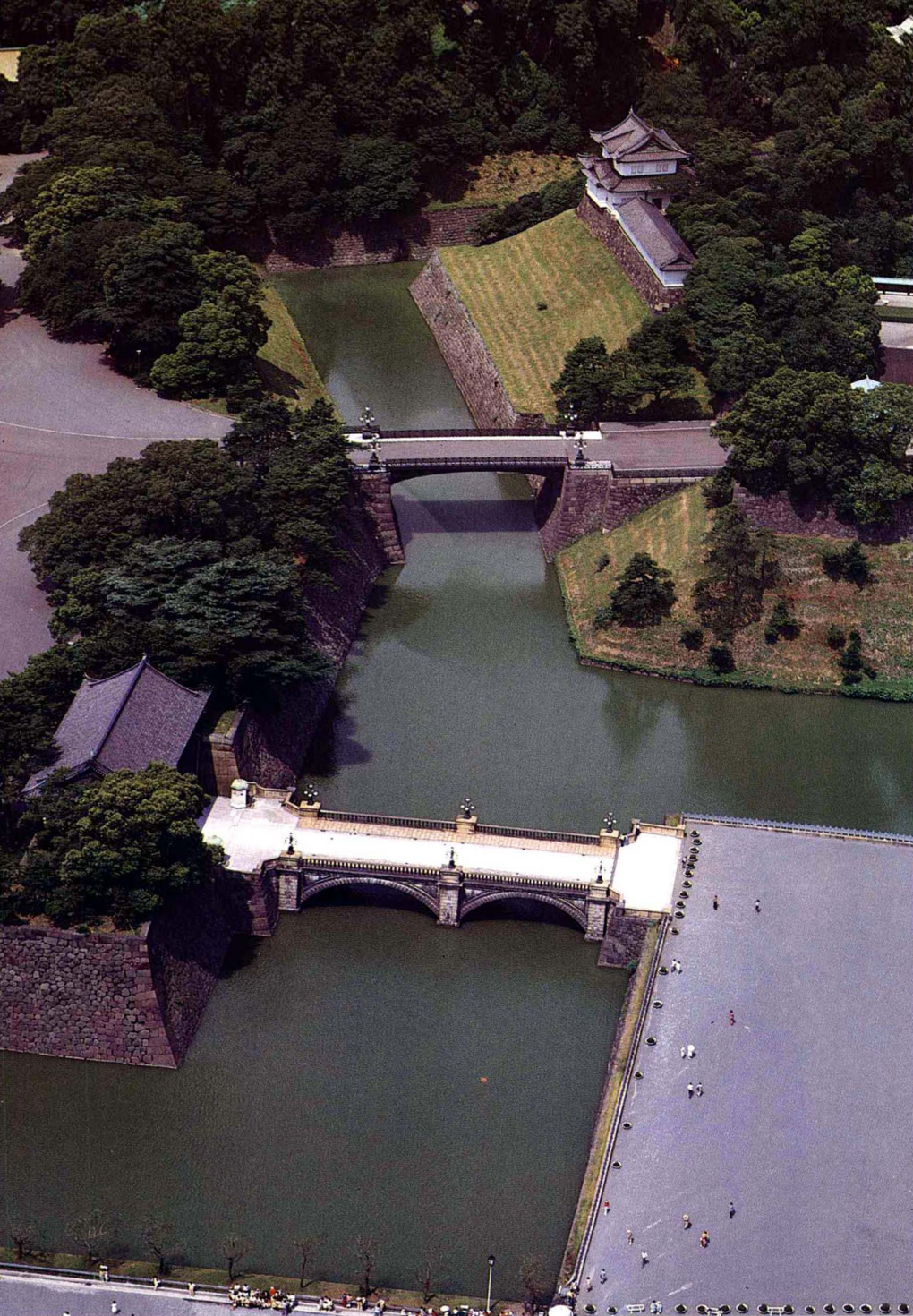
歴史の中の たたずまい

構成と文／熊田三夫

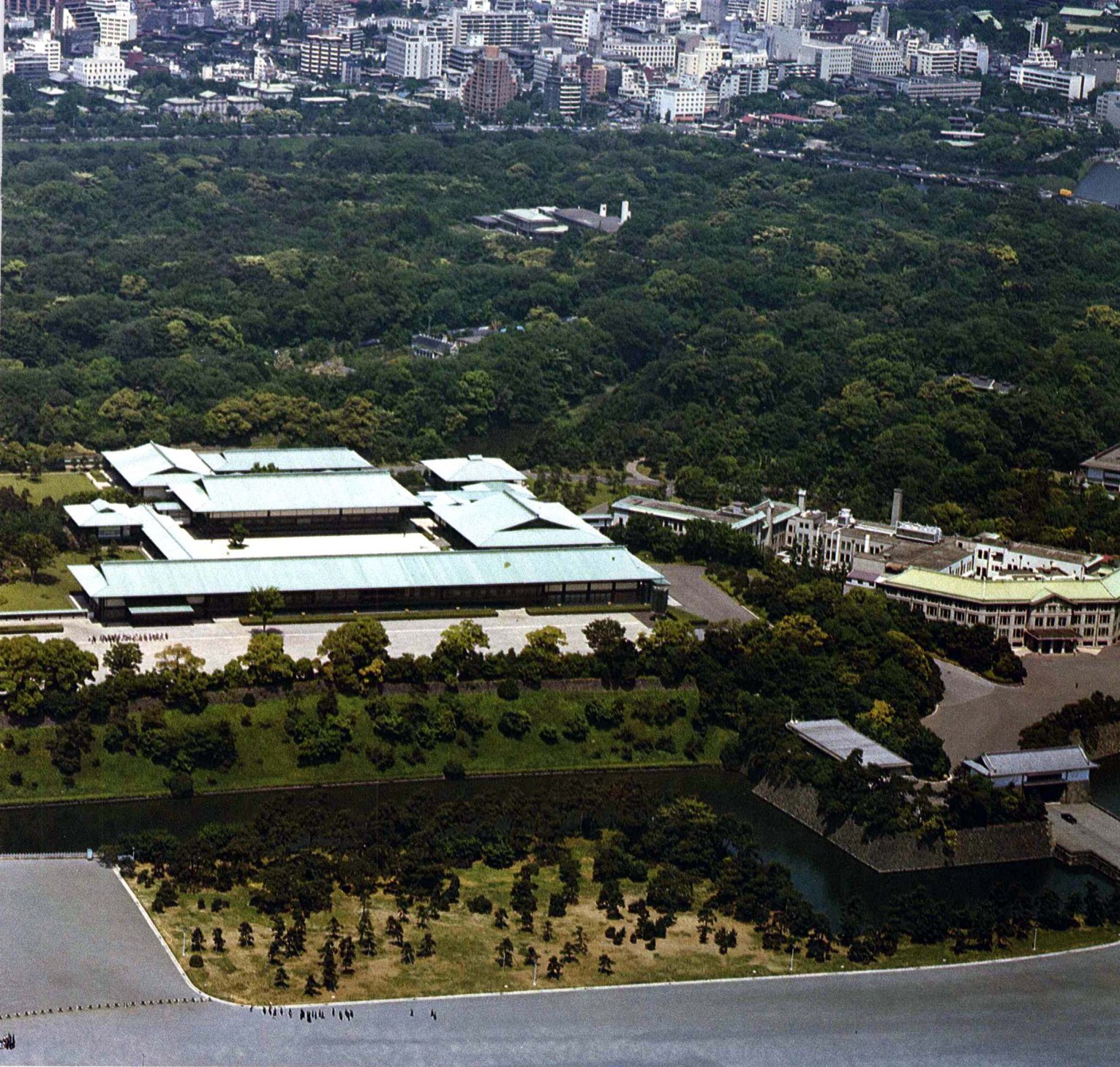
皇居はいうまでもなく昔の江戸城の跡である。現在の地域が皇居と定められたのは大政奉還後の1869年のこと。明治宮殿の完成した1888年から一時、「宮城」と称せられていたが、1948年にこの名称は廃止され、以降「皇居」と呼ばれるようになった。

皇居の総面積は約115万m²。この広大な地域は、内堀の蓮池を境にして、さらに旧本丸、二の丸、三の丸の一部を含む東側地区と、旧西の丸および吹上苑のあった西側地区に大別されている。

外から眺める皇居の姿は、堀と石垣に囲まれた大城郭の面影を残し、それでいて、その純日本的な構築美は周囲の現代的なビルディングと、ふしぎな調和を保っている。皇居には、古いもの新しいもの両方の美しさが息吹いているといえよう。



(左上下) 二重橋 皇居の象徴ともいふべき二重橋は、正式には、手前の橋を「正門石橋」、向こうの橋を「正門鉄橋」という。どちらも明治宮殿造営に伴って1886年に竣工したが、架けかえる前は木橋で、石橋を「西の丸大手橋」、鉄橋を「西の丸下乗橋」といった。下乗橋の部分は堀が深く、橋桁を二重に組んで架橋してあったため、この橋が「二重橋」と呼ばれていたが、現在は石橋・鉄橋の2つを総称して、一般に二重橋と呼んでいる。鉄橋は新宮殿建設の際に解体されて、1964年に現在の姿となった。



■ 西の丸と吹上御苑 ふきあげぎょえん

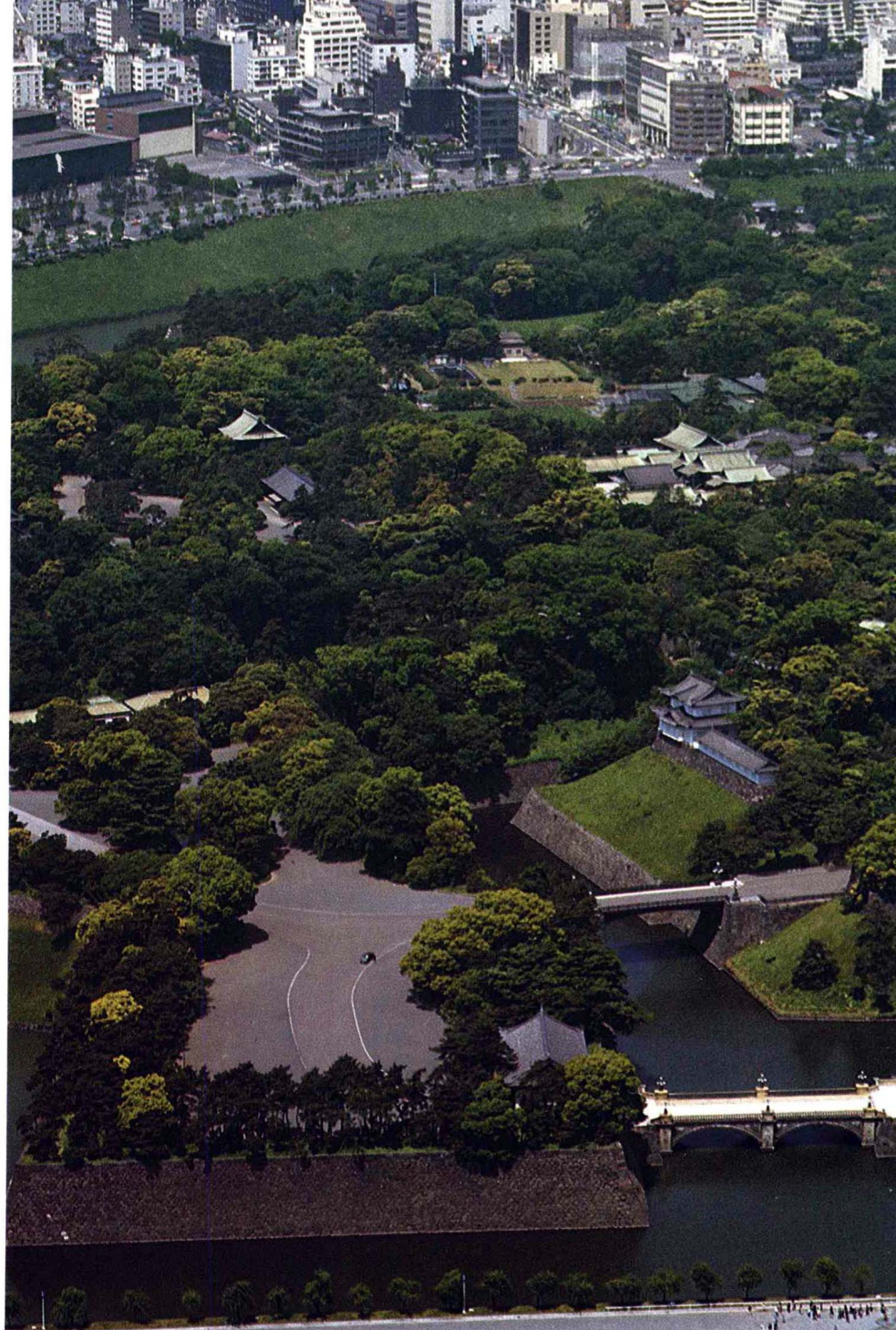
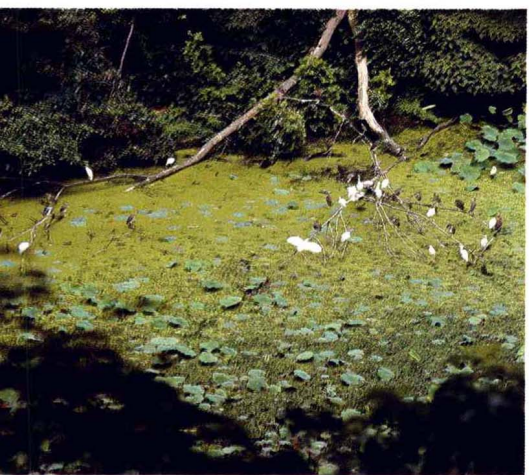
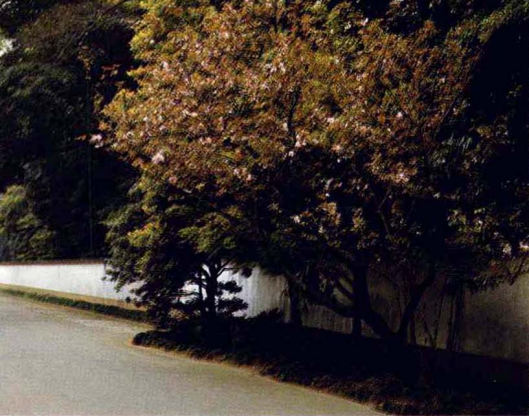
皇居の西側地区は総面積約72万㎡。新宮殿や宮内庁庁舎のある旧西の丸と、天皇・皇后両陛下の住居である吹上御所を含む北西部一帯の吹上御苑からなっている。西の丸が公的な地域とすれば、吹上御苑は両陛下の私的な生活地域といえる。また宮中三殿や生物学御研究所・御養蚕所などの施設もあって、現在ではこの西側地区が皇居の中核部となっている。

明治宮殿焼失後、1968年になって完成した新宮殿は、天皇陛下のご公務の場であり、儀式や公式行事がとりおこなわれる。簡潔にして平明なたずまいは、昭和を代表する建築物といえるだろう。

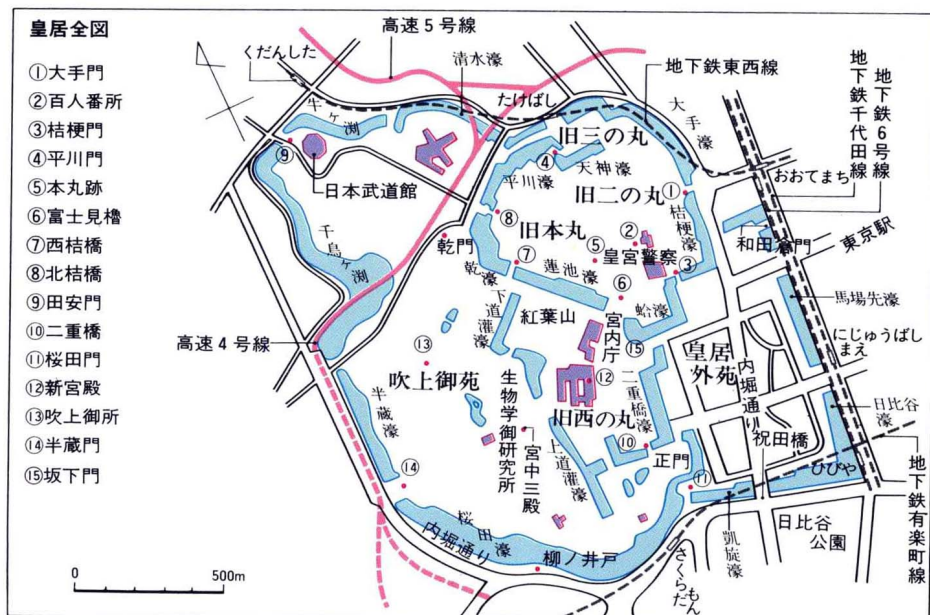
吹上御苑は、1961年に完成した吹上御所を中心に、花蔭亭・霜錦亭・観瀑亭・林鳥亭などの古い構造物が散在し、大池や大滝といった江戸時代の苑池の名残もある。苑内には樹齢200年をこすシイ・タブ・カシなどの樹木が茂り、野の花が咲き、都心の中であって、武蔵野の自然の景観を残す貴重な地域となっている。

(上) 外苑上空から見た皇居西側地区

(左) 宮内庁 戦後、庁舎の一部を改築し表御殿として使用された。



(上) 大道 西の丸地域と吹上地域をへだてる道。白壁の塀の内側が吹上御苑となる。
 (中) 下道灌漑 (下) 上道灌漑 いずれも太田道灌築城当時の面影を残している。

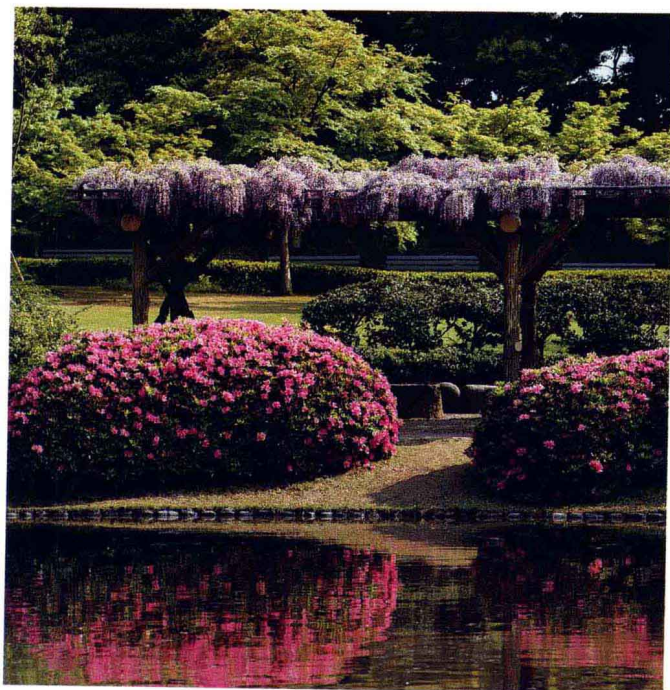




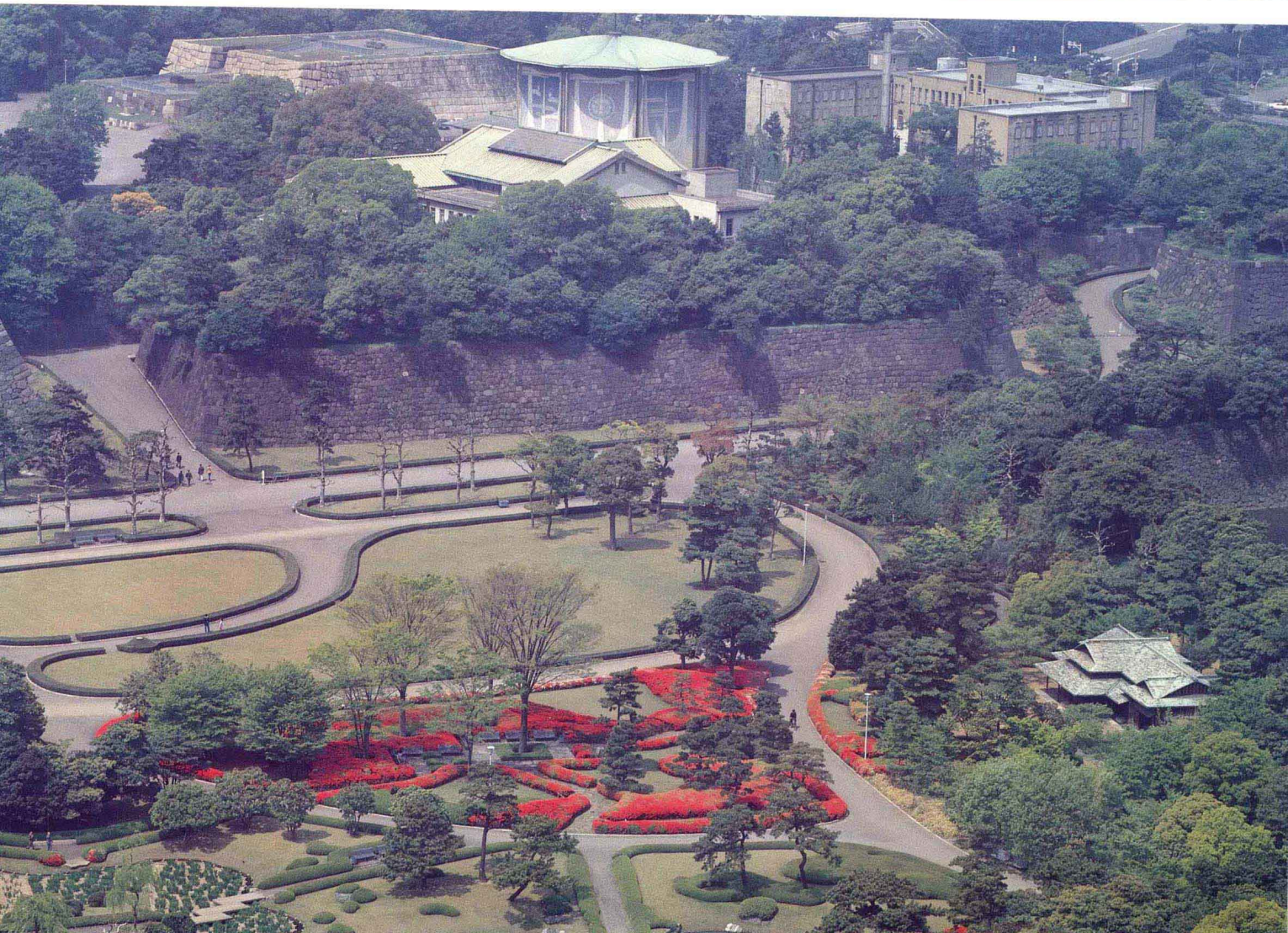
■ 東御苑

皇居の東側地区は旧江戸城の本丸・二の丸・三の丸の跡である。1960年から皇居造営の一環としてこの地区の整備工事が始まり、1968年に現在の東御苑^{ひがしぎょえん}が完成した。約21万㎡の広大な庭園は、いま皇居付属庭園として一般に公開され親しまれている。芝生や植え込み、遊歩道も整い、二の丸庭園や大手門の復原、与力^{よりき}のたむろした百人番所など、史跡と近代的な造園がみごとな造形美を作っている。

また、プラタナスの並木道や、よく刈りこまれたツゲやツツジの曲垣の回りには、苔むした堀の石垣や城門跡を眺めることができる。古城の中に出現した近代的な公園といえよう。



- (右上) 桃華楽堂 とうか がくどう 皇后陛下御還曆記念として1960年完成の音楽堂。
 (右下) 百人番所 ひゃくにんばんしょ 大手門から本丸に至るまでの城内最大の検問所。
 (上左) 二の丸庭園 ふたりのまるていけん 小堀遠州 こぼりえんしゅう 作と伝えられる回遊式庭園を復原。
 (上右) 本丸跡 ほんまるあと 面積13万m²。西北隅に天守台が残る。
 (下) 東御苑 鳥瞰 とうぎやん ちょうくわん 手前が二の丸跡。前方の高台が本丸跡。





■堀と門

皇居は二重橋^{はまぐり}・蛤^{あきよう}・濠^{いぬい}・桔梗^{はんぞう}・大手^{きくらだ}・平川^{きくらだ}・乾^{きくらだ}・半蔵^{きくらだ}・桜田^{きくらだ}・濠^{きくらだ}によって取り囲まれている。

これらの堀に沿って、江戸時代から残る門がいくつかある。部分的に修復したり、一部を取り除いたりしたものがほとんどだが、江戸城の名残りととどめている。

江戸城の城門は、ふつう櫓形門といわれる形式である。堀にかかった橋を渡ると、入り口の狭い高麗門がある。中は四角い広場になっていて、そこをかぎの手に曲がると豪壮な渡櫓門があり、櫓の下は堅牢な扉で閉ざされている。この渡櫓門をくぐってはじめて城内へ入ることができる仕組みである。

江戸城の城門の数は、見附や諸門を合わせて90を越したが、明治維新の後、ほとんど撤去され、残った城門の多くは現在皇居とその周辺にある。正門（旧西の丸大手門）と坂下門は渡櫓門のみ残り、北桔梗門と半蔵門は高麗門だけを残している。高麗門と渡櫓門がいずれも現存し、櫓形の形式を残しているのは、桜田門・桔梗門・大手門・平川門の4門である。

濠の土手や石垣、城門の回りには常緑樹や落葉樹が混生し、うっそうと茂り、四季折々、みごとな景観を形づくっている。





(右上) 半蔵濠 吹上御苑の裏側に位置し、両端を半蔵門と代官通りの土手で区切られる。深い矩形の箱のような堀に、晩春から盛夏にかけてハスが茂る。

(右下) 大手門 東御苑造営の際に昔の姿に復原された。堀に面した門が高麗門、右手の長い屋根が渡櫓門で櫓形の形式がよくわかる。

(左上) 桜田濠 皇居の中で最大の堀。芝土手にクロマツが茂り、秋になると、ヒガンバナが咲く。三宅坂から日比谷にかけて、ゆったりと屈曲する景観は雄大である。

(左中) 桜田門 櫓形の典型的な城門。皇居の外苑に位置しており、だれでも見ることができる。

(左下) 坂下門 宮内庁への通用門として一般に最もなじみが深い。手前の堀は蛤濠。





■ 皇居の櫓

江戸城の天守閣は本丸の西北隅にそびえていた。1606年に土台の石垣が築かれ、翌年、その上に層塔型の5層の天守閣が築かれた。日本最大の天守閣であり、封建支配の象徴であった。この天守閣を中心に本丸だけで櫓10棟、多聞15棟が築かれたというから、城郭の壮大さがしのばれる。

現在、皇居に残る櫓は4棟。東京駅からまっすぐ皇居へ向かってくると、まず最初に目に入る辰巳櫓、その向こう蛤（はまぐり）濠越しに顔をのぞかせている3重の富士見櫓、二重橋とセットになってなじみ深い伏見櫓と、一般の目にはつきにくい富士見多聞櫓がそれである。数こそ少ないが、あるものは高い石垣に中空高くそびえ、あるものは白亜の壁を堀の水に映し、皇居の景観に典雅な彩りを添えている。

(右上) 天守閣跡 1607年、この上に五層の天守閣が築かれた。

(右下) 富士見櫓 江戸城遺構のうち唯一の三重櫓。

(左上) 伏見櫓 1611年京都伏見城より移築。別名「月見櫓」。

(左中) 富士見多聞櫓 本丸石垣の上にあり、武器庫の一つ。

(左下) 辰巳櫓 城の東南にある二重櫓。桜田二重櫓ともいう。

写真／学研写真部

◆ 別 刷 目 次

《巻頭口絵》 ● 皇居	● 鉾物
《別 刷》 ● 国立公園…………… 357	● ゴシック美術…………… 401

地下に眠る神秘

構成と文／尾崎博・近山晶・岡重吉

鉱物を人類が利用するようになったのは、粘土鉱物を使って土器を作ったときが最初だろう。やがて金のような遊離した状態で存在する金属を知り、銅や鉄も知るようになる。紀元前3500年ごろ、エジプトでは木炭を使って銅鉱石から銅を還元し、取り出していたという記録があるが、金属を鉱石から取り出すことができるようになってから、人類の文明は飛躍的に進歩したと言えるだろう。以来、今日まで私たちの生活は鉱物資源と切り離して考えることはできなくなっている。

きらきら光る黄銅鉱の結晶や、美しい六角柱をなす水晶の結晶、菱マンガン鉱のバラ色の結晶などを見ると、私たちはこれらを造り出した自然の妙技に驚かざるを得ないが、この人の手で造り出すことのできない鉱物を、資源としてどのように使っていくのかは、将来の私たちの課題だろう。



金銀を掘る 人類が最初に発見した金属は金だったといわれる。日本でも古くから砂金が採取されていたが、戦国時代ごろから金山銀山の開発が進み、江戸時代には多種の大判・小判が作られた。
(『金銀採製全図』国文学研究資料館史料館蔵)

写真／学研企画資料室



■金属鉱石としての鉱物

鉱物の利用として一番多いのは、そこから金属を取り出して使うことである。私たちが利用している金、銅、鉄、アルミニウムなどの金属は、多くの鉱物や一般の岩石の中に少量ずつ入っているが、これから目的の金属を経済的に取り出すことはできない。対象となる物質が一定以上の高い含有率で存在していることが重要で、このような鉱物を鉱石鉱物という。

(右上) **銅鉱石の採掘** 同心円すり鉢状に露天掘りを進めている風景。鉱石運搬列車から、その規模の大きさが分かる。(アメリカ、ピングラム鉱山)

(右下) **鉄鉱石の採掘** 堆積性鉄鉱床での露天掘り風景。(オーストラリア、マウントニューマン鉱山)

(左上右) **砂金の採取** 金のように風化に強く比重の大きい鉱物は漂砂鉱床を作る。(ブラジル、アマゾン支流)

①**磁鉄鉱** 塊状、粒状のものが多いが、八面体や、写真のような斜方十二面体の結晶もある。強い磁性をもつ。

②③**赤鉄鉱** 塊状・土状・魚卵状・腎臓状などいろいろな形を示す。②のように板状結晶で金属光沢の強いものは鏡鉄鉱と呼ばれる。①とともに鉄の酸化化物で、鉄の重要な鉱石。鉄は、造船・車両・機械器具・建設業などあらゆる分野に使われる。

④**藍銅鉱** ⑤**黄銅鉱** ⑥**自然銅** いずれも銅の鉱石である。銅は電線・伸銅品・青銅・黄銅などに広く利用されている。藍銅鉱は銅鉱床の酸化帯にクジャク石とともに出ることが多い。黄銅鉱は銅・鉄・イオウの化合物で、しんちゅう黄色を示す。

⑦**自然金** 天然に産する金で、黄金色を示す。普通種々の割合の銀を含んでいる。装飾用・貨幣・電気回路・歯科用などに利用される金の、最も重要な鉱石鉱物である。

⑧**自然銀** 天然に産する銀で、銀白色を示す。銀の鉱石鉱物の1つであるが、産出は多くない。銀は写真材料・装飾品・貨幣などに使われる。

⑨**自然白金** 白金と他の白金族元素との合金で、形是不規則な扁平になる。灰銀白色を示し、砂白金として産出する。白金は電子工業・触媒・装飾用などに利用される。

写真/PPS 資料協力/凡地学研究社





7



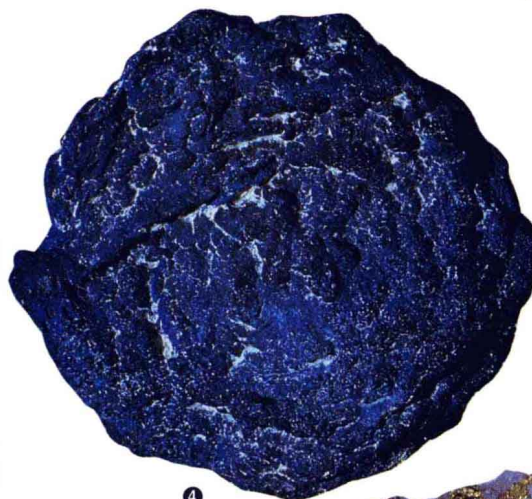
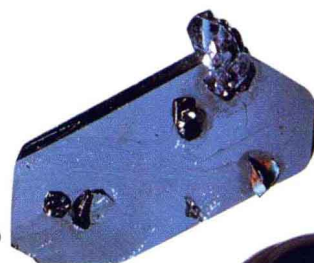
8



9



2



4



3



6



5



①方鉛鉱 鉛とイオウの化合物で、結晶は普通正六面体。鉛の最も重要な鉱石鉱物である。

②白鉛鉱 鉛の炭酸塩鉱物で、無色または灰色を示し、柱状・板状・錐状の結晶をつくる。鉛の鉱石鉱物。鉛は蓄電池・パイメタル・活字合金・鉛管・顔料・放射線遮蔽材などに利用される。

③異極鉱 亜鉛の珪酸塩鉱物。普通は無色透明だが、淡青色・灰色のこともある。ぶどう状・腎臓状のものが多いが、結晶形を示すときは上下で様子が異なるため異極鉱と呼ばれる。

④⑤閃亜鉛鉱 亜鉛とイオウの化合物だが、普通、鉄を含んでいて不透明であるが、ときには⑤のように半透明の結晶になることもある。亜鉛の最も重要な鉱石鉱物。亜鉛は亜鉛鉄板・合金・顔料・医薬品などに使われる。

⑥クロム鉄鉱 鉄とクロムの酸化物で、クロムの唯一の鉱石鉱物。クロムは鉄合金・めっきなどに利用される。

⑦紅砒ニッケル鉱 ニッケルと砒素の化合物。特殊鋼・めっき・触媒などに使われるニッケルの鉱石鉱物。

⑧輝安鉱 アンチモンとイオウの化合物で、アンチモンの主要な鉱石鉱物。アンチモンは活字合金・軸受合金などに利用される。

⑨スズ石 スズの酸化物で、唯一のスズの鉱石鉱物。スズはブリキ・合金・スズ箔などに使われる。

(左) スズ鉱石の採掘 マライ半島の漂砂鉱床はスズの重要な鉱床である。(タイ、プーケット島)



①



②



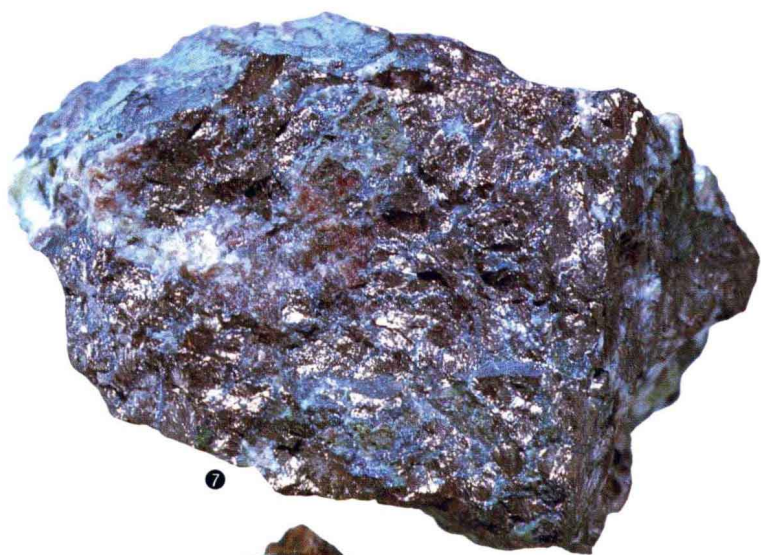
③



④



⑤



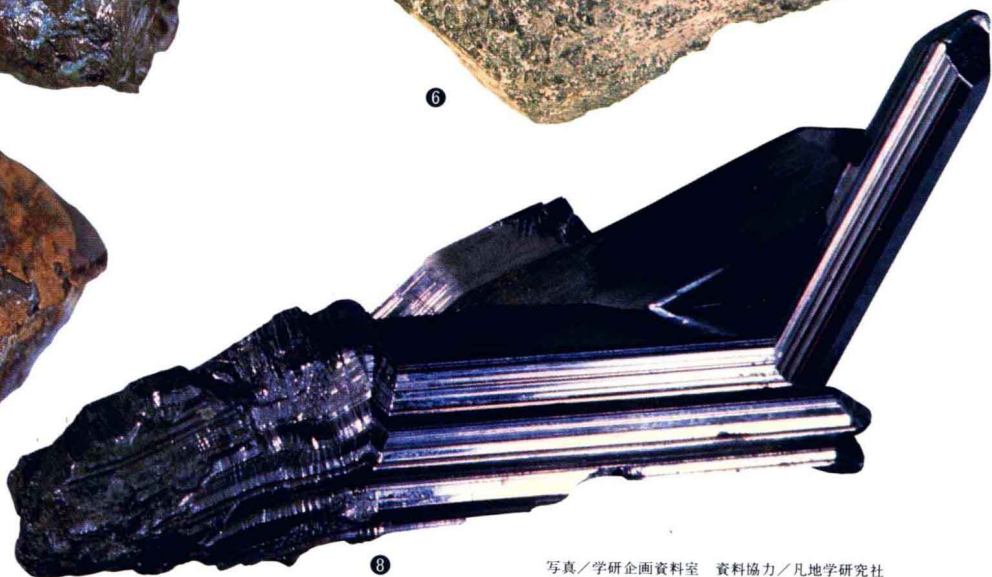
7



6



9



8

写真/学研企画资料室 资料協力/凡地学研究社